

第二章

カーリー大実母との出会い

——南神寺での修行——

ゴダドルの長兄ラムクマルは、カルカッタのジャマプクルという地区でサンスクリットの塾を開いていた。それからこの地区にある教軒の裕福な家に毎日読経に行つて、布施を受けてくる。この二つが収入の道であつた。ところが教師としての評判があがるにつれて生徒の数が増えて来、礼拝読経にまわる時間の余裕が次第に少なくなつてきた。しかし授業料はごく僅かであり、布施は重要な収入源であるから読経に行くのをやめるわけにいかない。そこで、田舎から呼びよせたゴダドルにこの仕事をさせ、自分はサンスクリットを教えることに専念することにした。

ゴダドルは宗教に関係のあることなら何でも大好きだから、大喜びで熱心にまじめにこの仕事に打ちこむ。頼まれた家に行つて、真心こめて祭壇をととのえ、神像を飾り、涙を流しながら讃歌をうたう。彼の勤行を一度でも見た人なら、この若いバラモンは一般の職業的な僧侶でないことがはっきりわかるのだ。もちろん評判は最高である。兄も内心喜んでいたが、勉強することにはさっぱり気乗りがしないようなので、そのうちにじつくり言つてきかせようと思つていた。とにかく、父の生きている時分からしたいようにさせてきた弟だし、また事実、この子は無理強いしても絶対にだめなのである。



1850年頃のカルカッタ（現在のコルカタ）

ところが二、三ヵ月も経つか経たぬうちに、自分では何の努力もしないのだが、ゴダドルはジャマプクルの人気者になってしまった。良家の婦人たちを含む大勢のとりまきが出てきて、ひっきりなしに招待されたり、訪ねてこられたりする。ゴダドルは、なるたけ彼らの希望に応じ、機嫌よく歌を聞かせたり話をしたりしている。とても勉強する暇などないのである。兄は少しあせってきた。

——これでは村にいたときと同じだ。今、学問を身につけておかなかつたら、将来、バラモンとして生計をたてていけないだろう。芸人ではあるまいし、歌や芝居がうまいだけでは、若いうちこそチャホヤする人もいるが、大人になったら相手にされなくなる。一人前のバラモンの世帯者としては、サンスクリットや、ヒンドウーの法律、星占学などを是非とも身につけておかななくてはならないのだ。

兄は決心して、ある日ゆっくり時間をかけて訓戒した。終わりまで黙ってきいていたゴダドルは、兄の顔をまっすぐ

見て朗らかな声で言い放った――。

「兄さん、生計を立てるための学問なんか、ぼくは絶対にしないよ。米やバナナを手に入れるために勉強するなんてマツピラだ。ぼくはね、人は何のために生きているのか、人生の真実の目的は何なのか、ということ勉強したい。そして人間が生まれてきた真実の目的を達成するために役立つ知識を学びたいんです。せつかくだけど、兄さんの言うような学問は、おことわりします」

バナナは、インドでは主食の代用にもなり、葉は食器として使う、まことに重要なものなのである。偉そうなことを言って、じゃ私に万一のことがあったらお前は誰に食べさせてもらう気だ？……と、喉元までこみ上げてきた言葉が、弟の明るく澄みきった眼に出あって奥に引こんでしまった。

いくつになっても幼い感じがぬけず、母親に似て単純な頭の持ち主で勘定にうとく、その上、他人には滅法思いやりのあるやさしい性質なので、身内のものはいくつ甘く見てしまうのだが、ゴダドルは時どき、ものの本質を見抜いた実に鋭い批評を口にして、周囲のどきもをぬくことがある。郷里の村の大地主であるラハ家の当主は、たいそう学問好きな人で、法事やその他の機会に知人を集めてはカルカッタから有名な学者を呼んでその講義を聴いたり、また学者たちの会合に何日か邸を提供したりしていた。ゴダドルは、そんなときには必ず行って町の学者の

話をきいたり、彼らの生態をつぶさに観察していたのである。

兄ラムクマルの友人にも、学者が何人かいる。彼は「学者」と称する人たちの生活と言葉を比較し、彼らに欠けているものは純潔と敬虔とである、ということに気がついていた。そして、この二つのものこそ彼がこの上なく尊重していたものなのだ。なぜなら、幼時からの度重なる三昧の経験から、神に合一するためには、精神の純粹さと、神の前に自分を無にしてしまうほどの敬虔さが必須のものであると覚っていたからである。この考えは彼の生涯の基調となつたのであつて、自らこれを重んじたばかりでなく、学者、医者など社会的に尊敬されている職業についていながら敬虔さを欠き、不潔な生活をしている人々に対して、痛烈に非難してはばからなかつた。

「トンビやハゲタカは、たしかに空高くとんでいる。だが目はいつも死骸の転がっていそうな窪みばかりを探しているのだ。なるほど学者というものは、たくさん本を読んだり聖典を勉強したりして、立板に水を流すように講義をしたり、自分でも本を書いたりできるかもしれない。けれども年中、女のことにかまけていたり、金や名誉を一番大切なものだと考えているなら、「学んだ人」とほんとに言えるかね？ いったい何を学んだというのだ？ 神のことを考えてもみないような人間が、「学んだ人」なのかね？」

彼は、自負心を与えて霊的向上を妨げるといふ理由で、大学の学位を嘲ることもあつた。し

かし、節度、純潔、無私、敬虔と結合している限りにおいて、学問を重んじたことは言うまでもない。学徳兼備の人に対しては心から敬意を表して、わざわざ話をききに行ったり、また宗教や哲学に関して学者や大学生たちの討論をきくのが大好きであった。しかし結局は、書物の学習より霊的修行に重点をおいたことはもちろんである。

あるとき、彼は勤勉な弟子の一人が、あまりにも書物を愛好しすぎるといって嘲弄ちやうろうしたが、これはプラトンのアリストテレスに対する同様の叱責が思い出される。つまり、彼の精神は神聖な音楽に充ちていて、他の音響はたとえそれが知性の音響であっても、彼の心靈交響樂と完全に調和しないかぎりは耳障りなのであった。幼年時代からこの特性が強く、自分の霊的熱望と一致しないことに対しては我慢ができないのである。相手が父代わりに自分を養育してくれた長兄であっても、いささかの遠慮会釈もなかった。

長兄ラムクマルは、三十歳も年下のこの弟に対して、もう二度と学問をすすめる勇氣が出なかつた。弟の将来が不安になったときは、父親の夢のことや、弟の天宮図のことを無理に思い出しては気をまぎらせていた。

ここで、ヒンドゥー教の神々と、インドのカースト制度について簡単に説明しておきたい。
ヒンドゥー教には、太陽神スールヤ、戦神インドラ（日本では帝釈天）など多くの神々があるが、なかでも最高

神とされているのは次の三神である。

○ ヴィシユーンヌ——別名ナラヤナ。ジャガナート（宇宙の王）。宇宙の保持者である。必要に応じて人間界に下生し、人びとを正しい方向に導く。クリシユナとラーマはその化身であって、仏教の開祖ブツダもまた、化身とされている。妃神は富と幸運の女神ラクシユミ（日本では吉祥天）。

○ シヴァ——宇宙の破壊者。種々の凶像で表されているが、寺院ではリンガ（男根）をその象徴としてまつてある。妃神はパールヴァティ。この二神の息子が象頭の福神ガネーシャで、ベナレスあたりでタクシーに乗ると、この親子三神の絵が、除災招福のお守りとして必ず運転席のところにはつてある。

○ プラマー——宇宙の創造者。これはウパニシャッド哲学による宇宙の大原理ブラフマン（梵）を神格化したもので、あまりに理念的すぎるせいか神話が発達せず、したがって前記の二神のように人々に信仰される神にならなかった。

○ カーリー女神——とくにベンガル地方で盛んな密教派の神。宇宙の大生命力、ブデヤヤシヤクティ根元造化力を神格化した女神で、大実母と呼ばれる。カーリーとは「黒玄」の意である。マーは現れる場所と役目によって相すがたと名ながちがう。

ドルガと呼ばれるのは、虎に乗った十本腕の美女で、力チカラを表す。パールヴァティはシヴァの貞淑な妻。アンナブルナは食物を豊かに供給してくれる女神。いずれもマーの種々相である。

さて、カーストというのは、血統とか種族とかを意味するポルトガル語で、インドでは「生まれ」という意味で、ジャーティと呼ばれている。上位からバラモン（僧侶）、クシャトリア（王族、軍人）、ヴァイシヤ（商人）、シュードラ（労働者）と、大きく四階級あることは、昔から有名であるが、現在ではこれが細分化されて、一言語地方では普通で数百のカーストがある。一つの村の中でも十から三十くらいあるということだ。カーストについては大昔から次のような規定があった。

(一) 所属するカーストは一生変わらない。

(二) 結婚は同カーストの間で行われる。

(三) 食事をともにしてよいのは同カーストの人にかぎる。自分より上位のカーストの人が作った食物は食べてもよいが、下位の人が作ったものを食べては「汚れる」という考えなので、金持ちの家などでは料理人としてバラモン階級の人を雇う。これならどんな客にでも大いばりで食事を出すことができるからである。

(四) カーストとしての父祖伝来の仕事をする。つまりカーストはいわば職階といってもいいのであって、カーストの名が仕事の種類を表すことが多い。召使いでも床掃除と窓ふきは別なカーストというわけで、外国人は面くらう場合がある。他のカーストの仕事には手を出してはいけないのである。

(五) 上位のカーストほど清浄であると考えられている。

以上のことはインドという特殊な社会環境をもつ亜大陸なればこそ、数千年も頑強に守られてきたのであろうが、考え方としては、このようなことは多少とも程度の差こそあれ、いずれの社会、いずれの時代にもあり得ると思う。ただインドではこの制度が宗教と直接に結合している。おそらく「聖なるもの」を「俗なるもの」から切り離して汚されないようにしようという意欲の強い民族性が、カースト保存の上に働いていたのではないだろうか。事実、バラモンのような上位のカーストほど、ヒンドゥー教徒として履行すべき義務が多く、生活の上でもきびしい規範があるのである。

現代では国際的な交流も多くなり、教育も普及されてきて、インドの社会も大きく変化しつつあるので、それに伴ってこのカースト制度もことに都会において徐々に崩れてきた。アウトカーストといって、カーストの中に入っていない賤民階級の存在は、この制度の最も非人道的な側面であったが、今世紀になってからガンジーやアンベードカルが熱心に解放運動を進め、独立後は憲法によって、この不可触賤民アンタツチャプルに対する差別が禁止され、特別の法律を作って彼らを保護するようにさえた。法律ができたからといっても、数千年来の風習が短日月でなくなることはないであろうが、この考え方も漸次改善進歩していくことは間違いないことと思われる。



マトラナート・ビスワス



ラーニ・ラースマニ

そのころ、カルカッタの南部地区ジャンバザルに有名な婦人が住んでいた。ラーニ・ラースマニといつて、四十四歳のとき夫に死なれて莫大な遺産をついだが、生まれつき商才があつたとみえて、ますます財産をふやし、どれほどあるのか見当もつかぬような大富豪となつていた。

非常に聡明な女性で、しかも信心深く、胆きの坐つた実に立派な女性であつた。貧しい人や難儀にあつてゐる人を見ると惜しみなく金品を与えて援助し、また働く人々の生活を護るために、女ながらも英国総督府を向こうにまわして堂々と渡りあつたこともある。四人の娘があつて、上の三人はそれぞれ結婚して子持ちになつていたが、三女が男の子一人残して病死したので、その夫のマトール（マトラナート・ビスワス）と四女のジャガ



カルカッタにあるラーニ・ラースマニの邸宅

ダンバを結婚させた。このマトールがなかなか秀れた人物で、義母の右腕となって事業や資金の全部を運営管理していたのである。ラースマニの家族は、シュードラ階級の「漁師」^{カイトアルタ}という低いカーストに属していたが、その善行の故に多くの人々から尊敬されていた。

晩年、ラースマニは寺院の建立を思い立ち、カルカッタの北約八キロほどのところにあるドッキネーシヨル（南神）という村に、二万五千坪の土地を買い、八年がかりで壮麗な大寺院を造りあげた。自分が低いカーストなので、文書の上ではその寺は自分の師^{グル}の名義にしておいた。さもないと、高いカーストの人々はそこに参詣に来たり食事の接待をうけたりしないだろうからである。彼女はかねがねこの寺院の主僧となる人を探していたが、ある知人からジャマプクルでサンスクリット



ドッキネーショル寺院

塾を開いているバラモン、ラムクマル・チョットパッダエを紹介され、その人柄がたいそう気に入って、ぜひ自分の願いをききいれてくれるようにと、婿のマートルともども丁重に頼んだ。

正統バラモンであるラムクマルにしてみれば、「カイワアルタ漁師」が所有運営する寺の雇われ僧になることは、まことに不名誉なことなので、最初のうちは気が進まなかったけれども、この義理の母子の人格の立派さと度重なる懇請たひかきに心を動かされて、基礎のできた塾をたんだ上、ドッキネーショルの寺院に移り住むことにしたのである。一八五五年五月三十一日にこの寺院は一般に公開されたが、当日にはおよそ一万五千人ないし二万人の人々が招かれて見事な饗応にあずかった。もちろん、ラムクマルはこの日からこの地に移った。

弟のゴダドルは兄のすることが大いに気に入らない。彼は当時カーストに対する偏見が非常に強かったからである。当日はやむを得ず兄とともにその地へ行ったことは行ったのだが、大勢の人々が口々にラースマニの功德をほめたたえ、ぜいたくな御馳走を遠慮なく頂戴しているなかで、一人だけ断食をしていた。そして兄がひきとめるのを振りきって、その夜は食料品店に立ち寄って油で揚げた米を買い、カルカッタへ戻ってしまった。

ゴダドルは、反対すべき積極的な理由を見出さな以上は、すべて正統バラモンの伝統を厳密に守った。カーストに関する考え方もその一つである。しかし、もしそれを破棄すべき理由が判明した以上は、断固としてその所信の通りに改める。これは一生を通じて変わらぬ彼の性格の一つである。寺院に住むことを嫌った理由は、第一に、建立者がシュードラ階級に属していること、第二には、宗教を職業として営むことに反感を懐いて^{いだ}いたからであった。

カーストは今も昔もインド社会における難問題の一つである。ただ前にも述べたように、この制度が宗教と直接に結合して、「聖なるもの」を「俗なるもの」に汚されまいとする意味が根底にあるので、ゴダドルのように宗教的本能の強いものが、カーストの区別を重要視していたことは、決して不思議ではないと思う。

第二に、寺院の僧侶になることはバラモンとして決して誇るべき職業ではない。ヒンドウー

教の意識から言えば、宗教は最も個人的な問題なのであって、公の寺院に公衆が集まって共同の儀礼を行なうということはない。もし資力が許すならば、どんな小さな家にも特別な礼拝堂かまたは部屋があつて、ヒンドゥー教徒は朝夕そこに入り、その一隅に坐つて、指を奇妙に動かしたり、鼻孔を閉じて独得な呼吸をしたりする。その過程は主として心理的であつて、他人はこれを理解することができない。

家に礼拝堂を持つ資力のない人は、河岸または湖畔に行くか、海が近ければ海浜に行つて、それを行なう。人々は時には寺院に詣つて神像を拜むけれども、寺に行かない人より行く人の方が宗教的であるとは決して言えない。ヒンドゥー教においては宗教は純粹に個人的な問題だからである。

寺院における僧侶の勤行は、聖典の文句を唱え、神像の前で灯火や鈴を振り、香花飲食を供えて生ける人に対するように神像を供養することだ。そうすることによつて僧侶が料金または給料をとるといふ事實は、結局、神聖なものを商売にすることである。ヒンドゥー教の通念によれば、教育家もまたその仕事が神聖であるが故に弟子たちから料金を徴収すべきではない。それは通常別途の、富豪たちの寄付によつて維持される。宗教の場合には、教育よりもつと強い意味において、これを職業とすることは卑しむべきことと考えられている。



ドッキネーショル寺院

さて、意地を張って一人でジャマプクルの家に戻ってきたゴダドルは、何日も経たぬうちに兄の許もとに行く。やさしい兄と別れて暮らすことなど到底できないことがわかったのである。しぶしぶながらも自分のところに来て仕事の手伝いをする気配の弟を見て、ラムクマルは安心して喜んだ。しかし、ゴダドルは食事のときは決して寺で料理されたものは口にしようとせず、一人でガンジス河の川原で米や野菜を煮て食べていた。

二週間、三週間とたつうちに、彼は次第にこの寺院が好きになってゆく。聖なるガンガの岸辺。周囲の静かな森。寺園に咲く色とりどりの花々。そして本尊のカーリー大実母ママを中心に、クリシユナを祀るヴィシユヌ堂があり、十二のシヴァ堂がある寺院全体は、荘厳なうちにも華やかで楽しい雰囲気きふきに満ちている。時どき会うラースマニやマトールも実に礼儀正しく、いい人たちだ。間もなく甥にあたるフリダイが職を求めて田舎から出てきていっしょに住むことに

なった。ゴダドルより三つ年下の幼な馴染みである。ゴダドルはだんだん機嫌がよくなり、フリダイと二人で散歩したり花をつんだり、まるで我が家にいるような気楽な気分になってきた。

一方、マトールは一目見たときから何となくゴダドルに惹かれ、正式に寺院の僧侶として勤めてもらいたいと兄のラムクマルに何度となく言ってみるのだが、なかなか思い通りにならない。ゴダドルは兄からマトールの意向を聞いてからというものは、できるだけ彼と顔をあわせるのを避けていた。気が進まなかつたからである。ある日、フリダイと二人で境内を歩いていると、遠くの方にマトールの姿が見えた。彼はいそいでフリダイの手をひっぱって道を変えた。フリダイがいぶかしく思っているところへマトールの召使いがとんで来た。

「ゴダドルさん、旦那様がお呼びです。だいじなお話があるので是非来てほしいとおっしゃっています」

叔父が困った顔をしてしぶっているのを見たフリダイは、理由をきいた。

「この寺に正式に勤めると言われるから、いやなんだよ。面と向かって頼まれると断りにくくてね——」

「どうしてイヤなの？ 叔父さん。結構な話だと思うけど……。それに、こんないい場所は他にないですよ！ ガンジス河の岸辺だし——」

「わたしは何にでも縛られることが嫌いなんだ。礼拝供養をするだけならいいけれど、もし

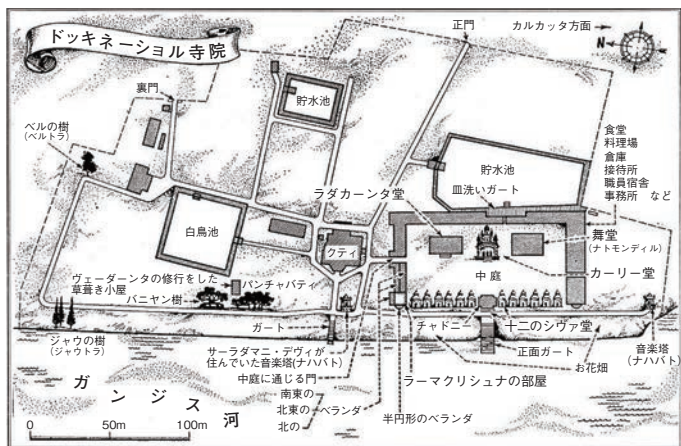
正式の役僧になったら、神像につけてある宝石だの寺にある高価な道具類なんかにも、責任を持たなけりゃならない。大変な仕事だよ。わたしにはとても出来ないし、する気もない。

——でも、もしお前がずーっとここにいて、わたしが出来ないことを皆してくれるなら引き受けてもいいけれどね」

これを聞いたフリダイは喜ぶまいことか、もともと職を探しに田舎から出てきたのだし、その上、昔からこの無邪気な叔父が大好きなのだ。二つ返事で承知したので、ゴダドルはマトールのところに行つた。マトールも心から喜んで、ゴダドルはカーリー堂付きの役僧に、フリダイはラムクマル、ゴダドル兄弟の助手に、ということに決めた。

このとき、ゴダドルは二十歳。そして以後、生涯のほとんどをこの寺で暮らした。大金持ちのマトール旦那パブと甥のフリダイ。この二人の献身的な世話によつて、これから十数年にわたるゴダドルのすさまじい修行時代は支えられるのである。まさに、天の布石というべきであろう。

ドッキネーシヨル寺院モンツァイルは、その本尊の名をとつてカーリー寺と一般には呼ばれている。ガンジス河の東岸にあつて土地の北と東には果樹園と花園があり、池も二つある。南側は煉瓦と漆喰しつこで仕上げ、西側の中央には幅広い立派な石段ガートができていて、ガンジス河を船に乗つて来た人はこのガートを登つて境内に入るのである。ガートというのは、沐浴のために作られた階段だ。



ドックネーショール寺院・見取り図

これを登りきると、チャドニーといって日覆いがついた石畳になっていて、門番が何人かいる。沐浴に来た人たちはこのチャドニーに坐りこんで、世間話をしながら体に油をぬるのである。また参詣人のなかで、供物のお下がりをいただく人たちは、食事のベルが鳴るまでここで待っているのだ。

チャドニーの両側にシヴァ堂が六つずつ並んでいる。その前が煉瓦をしきつめた中庭になっていて、この南北に広がっている方形の敷地の中央に、二つの寺が建っている。南に面した大きい方がカーリー堂、西向きの小さい方がクリシュナを祀ったラダカーンタ堂、またヴィシシュヌ堂とも呼ばれる。カーリー堂の真向かいに壮麗な舞堂（ナトモンディル）があつて、カーリー祭（フーリヤ）の日にはここで宗教劇が行われる。

境内の西側は十二シヴァ堂とチャドニーであるが、ほかの三隅には平屋の建物が数多くある。それぞれの御堂に付属した食堂と料理場、倉庫、接待所（出家や参詣人の希望者に無料で食事を供する所、それから事務所、職員の宿舎などだ。ガンジス河に面して一列に並んだシヴァ堂の一樣な円屋根、中央のやや低いチャドニーの屋根とそれに連なる立派な石段、これらの背後にそびえるカーリー堂の、尖塔のある九つのドーム——これらすべての美しい調和が、遠近ともにすばらしい光景になっており、ガンジス河を往来する船旅の人びとは、遠くの方からこの大寺院を眺めて、「ほう！ あれが、ラーニ・ラースマニの建てたお寺だ！」と言って感嘆するのである。

境内の北西隅、つまり十二シヴァ堂の真北にあたるところに部屋があつて、西側に半円形のベランダがついている。ここに立つとガンジス河の景色がよく見える。ゴダドルこと、後のラーマクリシュナは二十歳から生涯を終わるまで三十年にわたつて、この部屋に住んでいた。さてこの大寺院の本堂にあたるカーリー堂には、玄武岩で彫んだカーリー大実母の神像が祀られている。祭壇上の黒肌の女神は、錦織の豪華な衣裳を身にまとい、手、足、耳、鼻から足ゆびに至るまで金銀宝石や花などでさまざまに飾られ、千弁の銀の蓮花の上に横たわるシヴァ大神の白い胸をふみつけて立っている。腕は左右に二本ずつ。ふりかざした左手には血のしたたる剣を握り。さげた左手には人間の生首を持つ。右手の一方で慈悲祝福の印を結び、もう一方では恐怖をとり除く施無畏の印。——黄金製の頭蓋骨をたばねてネックレスとし、人の腕を

あまた吊した腰バンドをつけている。聖なる夫、絶対の象徴であるシヴァを脚下に見下ろして恥ずかしげに顔をあからめ、インドの貴婦人がよくするように突き出した舌を噛んでその優しい感情をあらわす。

両眼のほかには眉間にもう一つ目がある。この三の眼は悪しき心の者を狼狽させ、信仰あつき者には限りなく愛情を注ぐ。身の毛もよだつ破壊の恐怖と、無限に愛深き母の心とを結合したこの密教の女神は、大宇宙の生命力、アダヤシヤクテイ根元造化力の象徴であり、相反相對による無限の变化活動を超えて一なる大原理ブラフマン（梵）に帰入するという生物必至の道を教示しているのである。

このカーリー堂のほかには、同じ境内の中には、愛と美を象徴するクリシュナを祀るラダカーンタ堂があり、絶対者を表すシヴァを祀った十二の堂もある。密教派の恐ろしくも美しい女神カーリー。ヴィシヌーヌ派の心を魅する聖なる笛吹きクリシュナ。シヴァ派の真我アイトマンに熱中してすべてを放棄する主シヴァ。

ヒンドゥー教の三つの主な宗派の宗教感情の完全な融合が寺院の境内全体を支配していて、恐らくこれが、後になってあらわれたラーマクリシュナの宗教的実現の総合的態度の格好な背景をなしたものである。しかしもちろんこの神聖な家族の主人は、宇宙の大実母カーリーであった。そしてカーリー堂付きの年若い役僧ゴダドルの、純粹柔軟な心を魅惑し支配したのである。

カーリーの性さがと相すがたを知るは誰ぞ

六派の哲学 はるかに及ばず

絶対の歡喜に満ちあふるる真我アイトマン

カーリーは至聖の音 オームの如し

その心は大宇宙の法則なり

その子宮に全宇宙をはらむ

大いなるものの性と相を

知り給うはその夫つま 主シヴァのみ

(カーリー讃歌『不滅コタムリトの言葉』より)

ひとたび決心して引き受けると、ゴダドルは心をつくし身をつくして大実母マに仕えた。早朝から夜の九時まで、黒肌三眼の女神に仕え続けた。毎日、定きまった時間に沐浴をさせ、衣裳を着させ、飲食物を供え、銀の寝台に休ませる。勤行としては、礼拝、讃歌、読経、それから日の出前と日没直後には神前で灯火と香炉を振る。この優美な動作に合わせるように境内の北西と南西の隅にある二つの音楽塔ナハバトから笛と太鼓のやさしい調べが聞こえてきた。彼は毎日、香り高い色とりどりの花で女神を飾り、法螺と鐘の音楽に合わせて順次にこれらのことをした。

ゴダドルの勤行を見た人は誰でも、心からなる感銘をうけ、ゴダドルの歌う讃歌を聞いた人は、その声を決して忘れることができない。ラーニ・ラースマニも、寺に來ると必ず彼の歌を聞く。間もなく、ゴダドルは自分の理想神（信仰の対象）をこのカーリー大実母と決めた。そして全身全霊を打ちこんで女神に仕えた。

兄のラムクマルは、この寺に來てから収入も安定して、田舎の家族の生活にも心配がなくなり、また、何より気がかりだった弟が寺の所有者に愛されて真面目に寺の仕事をするようになったので、心からホッとした。そしてカーリー堂のことは一切ゴダドルに任せて、自分はラダカーンタ堂（ヴィシユース堂）の仕事を専らするようになる。やがてこの仕事もフリダイに代わってもいいようにマトール旦那に頼み、田舎の家に帰る準備をはじめた。やっと老母に親孝行もし、母のない息子アクシヤイに父親らしい世話もしてやれる時期が來たと思つたのである。ところが、用があつてカルカツタの北部、シヤムナガルに数日行つてゐる間に、急病にかかつてその地で亡くなつた。一八五六年の半ごろ、カーリー寺に來て、ほぼ一年後のことである。享年五十一歳であつた。

ゴダドルは兄のあとをついで、寺の主僧の地位についた。

幼い頃に父を失い、今また杖とも柱とも思つて頼つていた兄の死に出合つて、ゴダドルは深い悲しみの底に沈んだ。そして、この世の幸福のはかなさを痛感した、明日のなりゆきもわから

ないのに、幻のような幸福を追い求めて右往左往する人々——。

真実不変の幸福はどこにある？ どうしたら真の安心まことが得られるのだろうか？

このころから、ゴダドルの勤行はますます熱を帯び、傍はたから見ると気狂いじみてきた。定きまりの供養を終えた後も茫然として神前に坐り続ける。彼はもはや「神像」では満足できなくなり、生きている神を、大実母マの相すがたを見たくなったのである。インドでは一般に、ことにベンガル地方では、古くから神を肉眼で見たと言われる人が少なくない。たとえば十八世紀の宗教詩人、ラームプラサードは母なる神の活いきた姿をまざまざと見たという。ゴダドルはこうした話を素直に信じ、自分もまた、その姿を見ることができない理由はないと思った。

マーに会いたい。どうしても会いたい！ 憧れは日増しに強くなる。マーに会いさえすれば——すべてがわかり、本当の幸福が得られるのだ。こう思いこんだら最後、生まれつきの性格で、ただひたすらこのことだけを思い、情熱のありつたけを注いで目的に迫った。ムダ話などしているのは一秒でも惜しい。あれほど話好きだったのに、モノも言わなくなった。真昼や夜、寺の扉がしまっているときは、境内の北側に広がっている密林に入って坐を組み、マーに向かって精神を集中する。時にはこらえきれなくなつて大声でわめく。「マー！ マーはほんとにいるのか！ほんとにいるなら会つておくれ！わたしと話しておくれ！マーに会いたい！早く会つて、話がしたい！」

わが心は 君を求めて――

暗黒の部屋を手さぐり狂いあがく

世のすべてを忘れわが愛のすべてを捧げ

専心ひたすらに君を恋いひたすらに君を慕う

〔「不滅の言葉」より〕

フリダイは若い叔父のこの有り様を見て、全く困ったものだと思つたが、どうすることもできない。この叔父は赤ん坊の頃から自分で「しよう」と思つたことは必ず「して」、必ず「しとげる」のがクセなのだ。誰だつて止めることなんかできない。しかし、北側の密林には日中でも行く人などほとんどいない。野獣が出てくるかも知れないのだ。そんな場所へ夜一人で行つて坐禪デイゼーナするのだから、全く正気の沙汰とも思われぬ。あんなことをしては命にもかかわると心配して、フリダイは夜そつと叔父のあとについて行つて、見つからないように監視していた。時どき叔父の坐っているあたりに小石や木片などを投げてみる。おどかして坐禪をやめさせようというわけであつた。だが、さつぱり効果がない。

ある日、寺内にゴダドル叔父の姿がみえないので、今日は昼間から密林もりへ行つたのかと思ひながら急いで様子を見に行つた。アマラキの樹の下で叔父は瞑想していたが、何と、真つ裸

なのだ！ バラモンの印しるしである聖糸まで外している。フリダイは一瞬、「叔父さん気が狂ったのかな？」と思った。我知らずとびだして行って大声でどなった。

「叔父さん、しっかりして！ どうしたんです？ 真っ裸になって、聖糸まで外してしまつて！」

何度かどなると、ゴダドルはやつと気がついて、こう言った。

「お前は何も知らないんだから、黙っている！ 瞑想はあらゆる束縛から自由になつて行なうものだ。人間は生まれてこのかた、八つの枷かぎで縛られている。憎しみ、恐れ、恥、好き嫌い、利己心、虚栄、階級カースト、行儀作法。——聖糸も足枷だ。自分は一番上の階級だという思い上がりだ。宇宙の大実母に呼びかけるときは、こころした枷を全部はずして真っ裸になつて、全心を集中しなければだめだということが私にははつきりわかつたのだ。だからみんな脱ぎ捨てた。寺に戻るときにはちゃんと着て行くから心配するな！」

フリダイは胆きもをつぶして口もきけずにつっ立っていた。つい先刻まで、彼はこう思い込んでいた——叔父さんは自分が世話してやらなくては一人前のこともできない人だ、と。事実、日常生活では何から何まで気をつかつて世話をし、時には叱りつけることさえあった。三歳上のゴダドル叔父は、子供のような目つきをして素直すなはに甥の言うことを聞いていたのである。あれは——。一種の畏れおそがフリダイの胸をよぎつた。

大実母¹に対するゴダドルの恋慕の情は日増しに烈しくなり、食物も睡眠も極端に少なくなってきた。体の血液は胸と頭に集中して激しく流れ、そのため胸は常に赤らみ、時おり眼に涙がどっと溢れてくる。会いたい！ 会って下さい！ ラームプラサードに姿を見せたように、わたしにも活きた姿を見せて下さい！

彼はひねもす祈り、泣き、懇願した。神像の前で泣き叫んだ。

インドでは古来、精神統一の方法として瑜伽^{ヨーガ}が組織的に研究され伝承されているが、無学なゴダドルはもちろんそれを知るはずもない。ただ自分のエクスタシーの気分の衝動的な熱意に導かれ、ただ大実母^マを信じ頼りにして勇敢にその道を進んだのである。恋慕の苦しさに息も絶え絶えになったとき、マ^マはすぐ傍^{そば}まで来ていた。初めての経験を彼は次のように語っている――。

「そのとき、わたしは苦しくてたまらなかった。心臓がしぼられるようだった。自分には神を見る力がないのか、今生ではマ^マに会えないのか――。そう思うと、もう一時^{いつと}も生きているのがイヤになった。カーリー堂には大きな剣が一本つるしてあってね、そこにフト目がいった。そうだ！ あれで一思いに結末をつけてしまえ！ 剣にとびついて、つかんで、喉元にあてがった……。そのとたん、世界が消え失せてしまったよ！ 扉も、窓も、神像も、何もかも無くなってしまった。その代わりに、涯^はしない光り輝く霊の大洋が見えた。どちらを向いても光の大波！

それが四方八方からすさまじいなり声をたてて迫ってきた。たちまち、わたしの頭上におしよせて、くだけで、呑みこんだ。わたしは息がつまり、外の意識を失って倒れてしまった。その日と次の日をどうして過ごしたのか、まったく知らない。言葉には表せない歓喜の大海原に、わたしは漂っていたんだよ。そして光の海の底に大実母がいた」

二日の後、ゴダドルは歓喜三昧からさめた。そのとき、ふるえている唇からほとばしった言葉は、「マー！」

「上あごを虚空につけ、下あごを大地につけて、マー、と発音した。大実母をつかまえた、と感じた。水をかきわけて魚をギュッと捕まえたように——」

歓喜の二日が終わると、彼はまたも苦悩の嵐にもまれる。また会いたい！

彼は再び大実母の出現を求めて祈った。苦痛に耐えきれなくなると外部の意識を失い、恍惚の中にかの輝く姿を見た。こうして何度かの発作を通じて、マーがほほえみ、語りかけ、慰めてくれたりいろいろのことを教えてくれるのを経験した。またこの期間に、彼はよく螢の一群のように移動するきらめく光を見たり、光の霧に全身が包まれているのを感じたり、あるいは眼を閉じて開いてもあたり一面にひろがっている銀を溶かしたような光の波を見た。ゴダドルは普通の肉体感覚を超えた高次元の世界に入っていたのである。

彼の精神は著々と進歩し、感覺の制限を越え、遂に渴望していた理想を確實に把握した。宇宙の大実母は、彼が瞑想したり礼拝したりしているとき、必ず現れるようになる。かがやく霧の海からまずマーの足が見え、そして腰が、胸が、笑みをたたえた顔が、最後に光を放つ全身が見える。マーは彼に近づいてきて、甘くやさしい息づかいをしながら話しかけるようになる。遂には毎日の仕事について「こうしなさい」「そうしてはだめ」などと云つて彼の行動を指図するようになった。

このころ、瞑想に入るとき奇妙な経験をするようになる。それは身体の節々を通して一定の順序でガチャガチャという音がはっきり聞こえ、誰かが関節に錠を下ろして身体が絶対に動かないように固定している感じなのだ。そして何時間かの間、彼の体は一片の石の如く地面に釘付けになっていて、逆の順序で同じ音がするのを聞き、関節の錠が外されるのを感じるまでは、座を立つことはおろか硬直した姿勢から一ミリも動くことができなかった。

その次には間もなく心眼が全く開けて、マーの姿を見るのに瞑想も何も必要がなくなつた。神像の固さと冷たさは全くとけさり、それは今や石像ではなく、呼吸して脈搏ち、ほほえみ、祝福の言葉を投げかけるのである。夜、その日の勤行がすべて終わり、ゴダドルは自分の部屋に戻っていた。彼は聞いた——カリーー堂の銀の寢床から大実母が起き上がつて、かろやかに足どりで寺の二階に上がつていくのを。足環をチャラチャラ鳴らしながら……。彼は胸をと



カーリー大実母



カーリー堂のバルコニー

きめかして庭に出た。そして二階を見上げた。マールは露台バルコニーに立って髪を風になびかせながらガンジスの流れと遠くカルカッタの灯を眺めていた……。

ゴダドルは赤子のように大実母ママに愛着した。宗教上の慣習儀礼をすべて忘れ、全く神に酔える人となった。目と胸は酒に酔ったときのように常に赤味を帯びている。礼拝の座に坐ったかと思うとすぐ離れて、祭壇の上へのぼる。神像の頬をなでたり肩をさすったり、笑ったり、歌ったり、ふざけたり、しまいには生ける人を手相手にするように何やかやと話しはじめた。供物の皿から食物をとりあげて神像の口にあてがう。それからそれを自分で食べる。夜でもフリダイが目をさますと必ず叔父は眠っていない。恍惚として歌をうたったり、何か声高に話している。さもなければ瞑想している。ゴダドルの行動は、寺院の役僧として全く常軌を逸し、一般の眼には神に対する冒瀆ぼうとくとしか映らなかつた。

深く想えば 愛はうまれ

愛ふかきほど源みなもとふかく

つかみて信はゆるぎなし

大実母おんははの御足もと 甘露の海に

わが心つねに 浸りてあれば

礼拝、護摩、供物すべて用なし

〔不滅コタムリトの言葉〕より〕

「ゴダドルは気が狂った」

「ゴダドルは悪鬼にとりつかれた」

寺院の職員たちは何度もカルカッタのマトールバブ旦那に報告するのだが、マトールは黙って聞き流していた。

ある日、何の前ぶれもなくマトールは寺にやってきた。ゴダドルはカーリー堂で勤行していた——もちろん彼独得のやりかたで……。マトールは室内に入り、ゴダドルの一举一動を注意深く観察する。ゴダドルは全く気がつかない。ただ恍惚として大実母マを供養している。時間がたつうちに、マトールは寺全体に神聖な気が満ちあふれ、まさに神がここに臨在し給うのを肌で感じた。

「ゴダドルは気狂いになったのではない！ 正しく宇宙まさの大実母に祝福されているのだ！」と、

はつきり見抜いたのである。マトールははらと涙をこぼし、その場にひれ伏して、大実母の像と、その供養者を拝んだ。彼は寺の職員たちに一言も口をきかず、カルカタへ帰った。

次の日、寺院の最高支配人はマトール旦那から一通の命令書を受けとった。

「主僧ゴダドルがどんな行動をしても、ただの一つたりとも決して邪魔をしたり文句を言ったりしてはいけない。したいようにさせておくこと。何か希望することがあれば、どんなことでも叶えてあげなさい」

カーリー大実母を深く信仰しているラーニ・ラースマニも、婚のマトールからこの話をきいて大そう喜んだ。そして、寺院の所有者であるこの二人は、以後ゴダドルのこの上ない保護者となるのである。

しかし、間もなく、マトールは心配しはじめた。こんな事件があったからである。ラースマニが寺に行つて、女神を礼拝した後、いつものようにゴダドルの讃歌をきいていた。ふと、進行中の訴訟問題が心に浮かび、何とか勝てないものか、と思つた。とたんにゴダドルが歌をやめ、女主人の頬を力いっぱいなぐつた。生まれてはじめて人になぐられたラーニだったが、女神に罰せられたような気がしてその場にひれ伏してしまつた。このことを知つたマトールは悩んだ。自分や義母はゴダドルの境地を理解しているからいいが、誰にでも見境いなくこんなことをするようになったら、世間の風当たりが強くなって自分が困つた立場になる。マトールとしては、

ゴダドルにいつまでもこの寺に気持ちよく住んでいてほしいのだ。そこである日、なるだけ激情を抑える努力をして、世間の慣習きまりにしたがうようにしてくれと頼んでみた。

「神様だつて法則きまりをお守りになりますよ。その証拠に、赤い花の咲く木には決して白い花は咲かない。同じ枝に二色ふたいろの花が咲くのをお許しにならないのだ。わかりましたか？」

一言も口をきかずに聞いていたゴダドルは、翌日、一本の枝をマトールの目の前につき出して見せた。その支那バラの枝には白い花と赤い花が咲いていた。これにはマトール且バブ那も降参して、二度とゴダドルに説教をするのをあきらめ、成り行きにまかせることにしたのである。

やがてゴダドルは、寺院の主僧として正規の職責をはたすことができないと自分で気がつき、そのことをマトールに打ちあけて、自分の間フリダイに代わってもらうようにした。またこのころ、彼はフリダイに手伝わせて、北の密林の一部をきよめて修行の場所をつくった。いつもその下で瞑想していたアマラク樹を中心として、その周囲に、パニヤン、アスワッタ、ニム、マーメロスと、四本の樹を植えて小高くし、その樹蔭の台地で修行することにきめたのである。この五本の樹はインドでは神聖な木とされている。この場所はその後「五聖樹パンチャパテイの杜」と呼ばれ、現在でもドッキネーシル寺院に詣る巡礼者たちの尊敬の対象となっている。

フリダイは背が高く堂々とした体格で、頭もよく、しかも非常に行動的な男だったので、叔父に代わって寺の仕事を立派に勤めていたが、すぐ一人では間に合わなくなる。何故かというと、



五聖樹の杜（パンチャバティ）

ゴダドル叔父が自分の体力を度外視して修行にはげむあまり、放っておけば命にもかかわる状態になってきたので、叔父の介抱のために多くの時間が要るようになったのである。

フリダイの訴えをきいて、マトールは新たにもう一人、バラモンを雇った。この人はハラダリという名で、ゴダドルには年上の従兄にあたる。彼は学識深く、聖典の文句などには実によく精通しているが、知識と行動とは全く別、という型の人間であった。体当たりの修行をしているゴダドルを少しも理解しようとして、世間並みの定規で評価し、文句を言うので、二人は時どき口論することもあったらしい。ハラダリは、「立派な

書物を沢山読んで暗記していても、その内容をさっぱり理解していない人」の見本として、『不滅の言葉』の中によく登場してくる人物である。彼は一八五八年から約七年間、カーリー寺に勤めていた。

フリダイの猷身的な世話にもかわからず、ゴダドルの肉体と神経は非常に危険な状態となってきたので、二人の保護者は心配のあまり、カルカッタから一流の医者呼んできて診療を受けさせたが、これは全く無駄であった。ただ、ダッカから来た一人の医者だけは、「この人は偉大なヨーギ（ヨーガの行者）で、もしこれが仮に病気であるとしても、自分たちの治療法や薬剤では役に立たない」と言った。

そこでこの二人の保護者は相談の結果、彼の健康を取り戻させるためには貞潔を破らせて精神統一を妨げるより他はないとして、いかがわしい女をやとって誘惑させてみた。ところが、女が部屋に入るや否やゴダドルはマー！ マー！ と叫んで直ちに三昧に入ってしまう。もう一人別な女のためしてみたが、同じこと。ラースマニとマトールは、自分たちの愚行に気がついて恥じ入った。一般にインドの通念によれば、三昧などの精神統一は、戒律、ことに色欲の制御の厳守を前提としているから、戒律を破れば直ぐに統一が失われ、普通の状態に戻ると考えられているのである。しかし結局、気分を転換させるために、いちおうカマールブクル村の母のもとへ帰らせることにした。

故郷の家では母チャンドラマニと次兄ラメスワルがゴダドルの身の上を非常に案じていた。気が変になって寺の勤めも満足にできなくなつたらしい、などと人づてに聞いて、母は夜も眠れぬほど心痛し、ぜび郷里に帰してほしいとマトールにあてて何度も頼みこんでいたのである。

ゴダドルは一八五九年に故郷の村へ帰つた。しかし、その精神はなかなか常態に戻らず、人気のない火葬場などに行つては瞑想にふけつてゐる。母親は愛情の限りをつくし、あらゆる手段を講じて、もとのような健康と明るさを取りもどさせようとした。朗らかで、話好きで、ガダイは村中の人気者だつたのに！ 親類の人たちが、「これは物の怪にとりつかれてゐるのだ」と言うので、祈禱師を呼んでお祓いをしてもらつたりもした。

母の真心が通じたのか、息子のゴダドルは二、三ヵ月もすると体の調子もよくなり、ある程度もとの陽気さがもどつてきた。時どきは、おかしくなるけれども、常人と変わらない状態のときも多い。この際、結婚させてしまえばきつと落ち着くにちがいない、と母親は考え、本人にすすめてみたところ、「ああ、いいよ」と至極あつさり承知した。それ、とばかり親類中のものが嫁さがしをする。ところが、どうも適当な娘がない。どこの国でも同じことで、なかなか双方の条件と好みが合致しないのである。ゴダドルの気が変わらないうちに、と思つてゐるので気が気ではない。すると、ある日、ゴダドルは前三昧状態（三昧に入る一歩手前の意識状態）



サーラダマニ・デヴィの生家



ジャヤランバティ村

になってこう言った。

「あちこち探しても無駄。——花嫁はジャヤランバティ村の、ラムチャンドラ・ムコパツダエの娘」

半信半疑で親類のものが行ってみると、娘は一人だけいて、それがたった五歳だった。はなし縁談はすぐまとまって、ゴダドルは一八五九年の五月、この五歳の女の子、サーラダマニと結婚式をあげた。花嫁は二十三歳である。当時インドの一般の習慣で、これはただ婚約式という程度のものであり、幼い妻は十一、二歳位になるまでは夫と同棲せずに、実家の両親のもとで暮らすのである。この二人の場合は、生涯純潔な精神的関係に終始した。後になって、妻は夫のすぐれた弟子となり、夫の晩年から没後数十年にわたって、二人の

霊的な子供たち、即ち弟子や信者たちの世話や指導に献身して一生を終える。ラーマクリシュナのもとにきた多数の人々によって「大聖母」^{ネリカマ}と呼ばれて仰ぎ慕われたのが、このサーラダマニ・デヴィである。

母親がひきとめてなかなか離そうとしないので、ゴダドルはこの後、一年半近くも郷里に留まっていた。



サーラダマニ・デヴィ